「私の『戦後 70 年談話』 1」　　2025 年 12 月 01 日

今年は戦後 80 年である。50 年に村山首相、60 年に小泉首相、70 年に安倍首相が談話を出した。80 年は、石破前首相が、文民統制ができず、軍部の暴走が戦争に至ったという、個人的所感を出した。村山談話のような、植民地侵略によって損害と苦痛を与えたことに反省と謝罪の言葉はなかったが、誠実な歴史認識を示した。私は、謝罪することが信頼を得、和解、平和につながると思うのだが、政治家たちは自己正当化に躍起のようだ。「岩波書店」が 2015 年に、各界で活躍している戦争体験を持つ 41 人に「戦後 70 年談話」を寄稿してもらい、編集出版している。10 年前だが、読み応えがある論考なので、紹介したい。

宝田明氏は、ハンサムな映画俳優で人気を得ていたが、子どもの頃、満州で敗戦を迎え、ソ連軍に追われ、恐怖と苦労をした経験から、反戦・平和を訴え、活動をした人である。彼は、〈戦争を防ぐこと、起こさないようにすることは戦争を始める以上にエネルギーと努力が必要です。いままさにその時期だと思うんです。どんなに国が大きくなっても、戦争を好む国というのは、終局的に滅びます。人間が起こす大罪は戦争を起こすことです〉と書いている。今日の戦争には、勝者、敗者はない。命を失い、消耗し尽くすだけである。大国になる必要はない。石橋湛山元首相は、「膨張こそ国力を衰退させる」と警鐘を鳴らし、小国として自立し、国際協調と平和の国造りを主張した。小さくとも、人権と平和が守られ、安心して暮らせる国造りが、戦後の出発点であったはずである。

中川李枝子氏は『ぐりとぐら』などを書いた児童文学作家である。彼女は〈新制中学の社会科で傷痍軍人の先生が憲法の前文を涙で声をつまらせながら読み上げて「暗記しろ」と命じたのを私は決して忘れない〉と書いている。私も中学校の社会科の授業で、教育大学を出立ての先生が、憲法の国民主権と民主主義と平和主義について情熱を込めて話したのを記憶し、それが、憲法との出会いであった。傷痍軍人に関しては、列車の中で、寄付を求めたが、応じてくれなかったらしい。デッキで泣くように怒っていたのを見た。国策に従い、兵隊になり、傷を負ったが、戦後には同情してもらえない現実があった。

ちばてつや氏は『あしたのジョー』を書いた漫画家で、子どもと一緒にテレビで観た。彼は、〈戦争を起こすのが人間なら、戦争が起きないよう努力できるのも人間です。中国人でありながら、徐さんが私たちを助けてくれたのは、徐さんと私たちの間に人間的な交流があったからだと思います。(千葉一家が中国からの逃避行中、一行からはぐれ、極寒の中で途方に暮れていた時、徐さんが自宅物置にかくまい助けてくれた。) 人間には言葉があり、表現する力もある。それらを使って、戦争が二度と起きないように知恵を働かすべきです〉と書いている。現在は、「力の支配」が大手を振っている。「力による平和」などとも言う。しかし、力で平和は構築できない。信頼し合う言葉で人間的な交流をいつも作り上げておくことが大事ではないか。徒に「仮想敵国」などと言い、緊張を煽るべきではない。現在の日本は、米国への無分別な追従よりも、アジアへの連帯を模索すべきである。

イラストレーターの山藤章二氏は、〈70 年経った。戦争を知らない世代ばかりの内閣に一抹の不安。どういう国になろうとしているのか、世界は関心を寄せている。私の個人的提言を贈るなら、あらゆる意味で「大国（スター）になろうとするな」である。地理的条件や民族性から、「存在感のある脇役（バイプレーヤー)」国家が身丈に合っている。文化と精神性を発信してもらいたいのだ。君なら出来る〉と書いている。「世界の真ん中で咲き誇る国」にならなくでも、文化や精神面で世界に存在感を示し、国際協調に基づく平和を発信する国造りをしようと言う発言に、私は賛同する。